

目次

凡例 ……15

序章 十世紀後半から『源氏物語』誕生まで ……17

はじめに ……17

一 和漢兼作の時代 ……17

二 好忠と「河原院周辺歌人」 ……19

三 物語誕生の場と文化圏 ……21

四 本書の構成と内容 ……24

おわりに ……27

第一部 『源氏物語』における表現の達成

一 歌ことばによる表現の創造

第一章 空蟬物語の引歌表現

- 『一条摂政御集』との関わりを中心に—— …… 33
- はじめに …… 33
- 一 『一条』一三二番歌の歌群における位置と詠者 …… 35
- 二 『一条』一三二番歌の本歌と『伊勢物語』 …… 40
- 三 空蟬物語と『一条』 …… 44
- 四 『一条』と『源氏物語』 …… 48
- おわりに——空蟬巻末歌について …… 50

第二章

関屋巻の音風景——「音泣く」空蟬の変容と逢坂の関—— …… 57

- はじめに …… 57
- 一 関の清水と涙 …… 58
- 二 帚木三帖での「音泣く」空蟬と蓬生巻の末摘花 …… 62
- 三 「逢坂の関」での邂逅の意図 …… 66
- おわりに——関屋巻以後の空蟬 …… 71

第三章

夕霧巻に見られる歌物語の系譜——帚木巻を起点として—— …… 73

- はじめに …… 73
- 一 空蟬と落葉宮の物語における語りの類似 …… 75
- 二 品定めを経験談と雲居雁・落葉宮 …… 79
- 三 妻の嫉妬による夫婦のいさかい …… 84
- 四 帚木巻と夕霧巻にみられる仏教観 …… 87
- おわりに …… 91

第四章

夕霧物語の表現の方法

——「河原院周辺歌人」詠との共通の歌ことばを通して—— …… 95

- はじめに …… 95
- 一 少女巻——萩のうは風 …… 96
- 二 野分巻——刈萱の乱れ …… 100
- 三 藤裏葉巻——花のひもとく …… 101

四 柏木卷——葉守の神のゆるし	104
五 夕霧卷——小野・緑の袖・葛の葉・草むらの虫	107
六 夕霧の心情表現	111
おわりに	115

二 漢詩文による表現の創造

第五章 光源氏の女人哀悼表現における閨怨の情

——「塵積もりぬるところ」を中心に——	121
はじめに	121
一 「亡き魂ぞ」の歌	122
二 「君なくて」の歌	125
三 夕顔と紫の上の哀悼場面	129
四 中国の悼亡詩と日本の亡妻哀悼歌	133
五 願文における妻の哀悼表現	135
おわりに	138

第六章 柏木哀悼における「柳のめ」

——元白詩語の利用と夕霧物語の始発——	143
はじめに	143
一 柏木の哀悼場面の解釈について	144
二 和歌や漢詩文に詠まれる「柳のめ」と「柳眼」	150
三 「柳」からの連想	153
四 なぜ「柳のめ」なのか	157
五 哀悼表現の先例としての漢詩文	159
おわりに	163

第七章 末摘花の「紅の涙」と「紅花染め」

——「秦中吟」の「重賦」引用の意味——	167
はじめに	167
一 末摘花の歌に詠み込まれた「紅の涙」	169

二 「紅の涙」の諷諭するもの	171
三 一条天皇と諷諭の精神	175
四 紅花染めの流行と禁止令	178
おわりに	182

第八章 「中の衣」と「色好み」

——「美人賦」による好色批判と物語内引用——	187
はじめに	187
一 発端となる末摘花巻——卓文君の故事と「紅の涙」	188
二 漢語「中衣」と「美人賦」	194
三 紅葉賀巻——「夜聞歌者」・「美人賦」・「紅の濃染の衣」	196
四 明石巻——「琵琶引」・卓文君の故事・「形見の衣」	201
五 少女巻——卓文君の故事と「紅の涙」	207
六 宿木巻——『落窪物語』の「かばかり」引用によるパロディ化	210
おわりに	212

第二部 『源氏物語』の表現への道

一 歌物語における表現の創造

第九章 『伊勢物語』五十二段と漢詩文

——屈原・潘岳との関わりを通して——	221
はじめに	221
一 「飾り粽」と屈原	222
二 「雉」と潘岳	226
三 連想による段落の展開	231
おわりに	235

第十章 『伊勢物語』六十三段と仏教思想

——『万葉集』「みやびを」問答の影響を通して——	239
はじめに	239

一	六十三段の「世ごころ」と「心なさけ」	……240
二	六十三段と『万葉集』「みやびを」問答——「方便」と「恥」	……245
三	『うつほ物語』「一条北の方物語」と「みやびを」問答——「恥」と「なさけ」	……250
四	六十三段の「けぢめ見せぬ心」と「慈悲」	……256
	おわりに	……260

第十一章 『大和物語』八十九段の和歌表現と構成についての考察 ……265

	はじめに	……265
一	「網代—氷魚—寄る」和歌表現の変遷からみる修理歌の特異性	……267
二	『拾遺集』の詞書と部立からみる修理歌の特異性	……272
三	『蜻蛉日記』の引歌の方法からみる修理歌の特異性	……275
四	八十九段の和歌の配列からみる構成の特異性	……278
	おわりに	……281

二 『うつほ物語』における表現の創造

第十二章 『うつほ物語』の和歌における表現の方法

	——好忠・順歌との共通語彙を中心に——	……287
	はじめに	……287
一	あて宮求婚歌群の和歌表現	……287
二	「露」「積もれる山」	……291
三	「鳩鳥」の「鳴く」思い	……294
四	不遇表現としての「松の緑」と「数ならぬ身」	……296
五	「初期待数歌」と『うつほ物語』の詠歌方法	……299
六	『うつほ物語』と「河原院周辺歌人」詠との関わり	……300
	おわりに	……303

第十三章 忠こそ巻における和歌表現の方法

	——『古今六帖』との関わりを中心に——	……307
	はじめに	……307
一	「をかしき浅茅」	……308

二 「葎生ほす宿」	…… 311
三 「蓬」の不在	…… 314
四 「菅原伏見の里」	…… 316
五 歌語の連想による和歌の展開	…… 319
六 『古今六帖』の歌題による発想	…… 322
おわりに	…… 324

第十四章 実忠物語と『平中物語』

——近江に関連する共通語彙を中心に——	…… 327
はじめに	…… 327
一 志賀寺での実忠と「平中」	…… 327
二 志賀寺参詣の意図	…… 332
三 「浜千鳥」	…… 335
四 「山彦」	…… 340
五 平中と近江	…… 344

おわりに …… 346

第十五章 「まめ人」仲忠の「色好み」

——内侍のかみ巻からの新たな人物造型——	…… 349
はじめに	…… 349
一 あて宮との疑似恋愛①「下紐解くるは朝顔に」	…… 350
二 あて宮との疑似恋愛②「あだくらべ」	…… 353
三 歌枕「名取川」による「色好み」像の形成	…… 357
四 「色好み」の実情①「さま宮と「これこそ」への懸想	…… 360
五 「色好み」の実情②「宰相の上への懸想	…… 363
おわりに	…… 366

第十六章 蔵開巻における神仙譚を利用した語りの方

——仲忠の造型を中心に——	…… 369
はじめに	…… 369

- 一 仲忠と女童の祝賀の場での出逢い …… 370
- 二 吉野に由来する栢枝伝説と五節の舞 …… 374
- 三 仲忠と仲頼の妹との一条殿での出逢い …… 376
- 四 蔵開巻と『遊仙窟』 …… 381
- おわりに——内侍のかみ巻から蔵開巻の展開について …… 383

第十七章 後の宮の造型——『うつほ物語』から『源氏物語』へ—— …… 387

- はじめに …… 387
- 一 「青蠅」の解釈をめぐって …… 388
- 二 後の宮の人物像 …… 392
- 三 弘徽殿太后の人物像と二人の後の比較 …… 400
- 四 「後の宮」の呼称と第三の後の宮・藤壺 …… 406
- おわりに …… 409

結章 歌ことばと漢詩文による新たな言語世界 …… 413

- はじめに …… 413
- 一 並びの巻にみられる歌ことば表現 …… 413
- 二 漢詩文が生み出す時空における表現 …… 416
- 三 「河原院周辺歌人」の再評価 …… 418
- おわりに …… 420

- 初出一覧 …… 423
- あとがき …… 427
- 索引（和歌索引、書名索引、人名索引、重要語句索引） …… 001 ㊦

凡 例

一 すべての本文について、私に適宜表記を改めた箇所や、注記を施した箇所がある。

一 『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『古事記』『日本書紀』『蜻蛉日記』『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』『梁塵秘抄』『古来風躰抄』『栄花物語』『今昔物語集』は、新編日本古典文学全集による。『源氏物語』については、引用部の末尾に巻名・巻数（○で囲まれた数字）・頁数（漢数字）を記している。

一 『うつほ物語』は、『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう、二〇〇一年）により引用部の末尾に、巻名・頁数（漢数字）を記している。

一 『落窪物語』は新日本古典文学大系による。『勢語臆断』は『伊勢物語全評釈』所収の本文、『源語秘訣』は源氏物語古註釈叢刊第二巻による。

一 『万葉集』は新編日本古典文学全集、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『伊勢集』（平安私家集所収）は新日本古典文学大系、『古代歌謡集』（風俗歌）は日本古典文学大系、『一条撰政御集』は『一条撰政御集注釈』（平安文学輪読会、塙書房）、『好忠集』は和歌文学大系により、その他の歌集については、『新編国歌大観』による。和歌には引用の末尾に歌番号（漢数字）で記している。

一 『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『菅家文章 菅家後集』『性霊集』は日本古典文学大系、『本朝文粹』は新日本古典文学大系、『詩経』『楚辞』『莊子』『礼記』『論語』『文選』『玉台新詠集』『蒙求』『白氏文集』は新釈漢文大系、『藝文類聚』は上海古籍出版社の一九九九年第二版、『元稹集』（一九八二年）は中華書局出版、『桃花源記』は『陶淵明集』による。『遊仙窟』は、江戸初期無刊記本の本文によるが、『遊仙窟全

講増訂版』（明治書院、一九七五年）も本文比較の際、参考にした。『晋書』は『六朝詩人傳』（大修館書店、二〇〇〇年）による書き下し文を参考にした。

一 『法華経』は岩波文庫により、その他の仏典は『大正新脩大藏経テキストデータベース二〇一八版の本文を用いている。

一 『続本朝往生伝』は日本思想体系、『日本三代実録』『政事要略』『古事談』は新訂増補国史大系の本文を用いている。

一 右のいずれの場合も、諸本等によって異同を示す必要がある場合には、その都度、本文や注に示した。

序章 十世紀後半から『源氏物語』誕生まで

はじめに

『源氏物語』の表現は、いかにして創造されたのだろうか。『源氏物語』以前には、和歌をはじめとして、漢詩文や仏典、作り物語・歌物語など様々な先行作品が存在した。それらの作品をもとにどのようにして新たな文学作品を創造しているか、『源氏物語』の表現に至るまでの道のりとその達成を明らかにするのが本書の目的である。序章では、特に『源氏物語』誕生直前の十世紀後半という時代と文学について論じていきたい。

一 和漢兼作の時代

平安時代は国風化が進んだ時代と言われるが、遣唐使が廃止された後も漢詩文が正統な学問であり、政治の世界の文書や貴族の日記はすべて漢詩文で書かれていた。漢詩文は官職をめざす男性にとっては、必ず身に付けなければならない教養であり学問であった。和歌は、『古今集』が勅撰和歌集として編まれることで、初めて晴れの文学として認められることになったが、国風暗黒時代と言われる平安前期の時代においても、『万葉集』の時代から脈々と和歌は詠まれ続けていた。『古今集』成立以前の在原業平や遍照らの六歌仙と『新撰万葉集』の和歌には、漢詩文の強い影響がみられる。六歌仙の和歌では、業平の対句的な詠みぶりや、遍照の閨怨詩的な詠法などが挙げられ、宇多天皇の時代に成立した『新撰万葉集』には、和歌とそれに対する漢詩が一对で置かれ、漢

詩的な詠みぶりのみられる「寛平御時后宮歌合」の歌などが数多く含まれている。『新撰万葉集』の撰者とされる菅原道真は、漢学者であるとともに詩人であり歌人でもあった。その道真をはじめ、漢詩文に通じた紀友則、藤原敏行らの歌人が活躍した宇多天皇が中心となる文化圏では、特に中国六朝の漢詩文が重視され、その影響を受けつつ、技巧的で知的かつ遊戯的な和歌が好んで詠まれていた。その一方で、道真の漢詩から徐々に和習化された表現がみられ、時代が下るに従い、詠詩の題材も和習化が進んでいくことになる。

『古今集』は、その後の和歌の規範として君臨することになるが、その撰者たちによって意図的に封印された和歌群がある。それは、宇多天皇の時代から盛んに詠まれるようになった屏風歌である。撰者の一人紀貫之は、その歌集の半分以上を屏風歌が占め、職業的屏風歌人といえるが、その屏風歌はほとんど『古今集』には入集していない。『後撰集』においても、その撰者である源順・清原元輔・大中臣能宣らは代表的な屏風歌人でありながら、撰者の歌は撰集しないという方針のために、一首の屏風歌も選ばれていない。そこで『拾遺集』になると「遺されたものを拾う」というその名の通り、屏風歌を積極的に撰集し、さらに梨壺の五人によって訓読された『万葉集』の歌や、伝承歌などが多数入集されることになった。『拾遺集』の撰歌姿勢は、十世紀後半の和歌の在り方をも示している。また、藤原公任による『和漢朗詠集』は、屏風絵の絵解きの詩歌を集めてできたのではないかと考えられている。⁽²⁾このように、当時屏風絵が生活に密着した存在としてあり、その絵について詠まれた屏風歌の評価も高かったことがわかる。『枕草子』や『源氏物語』の作品の表現には、屏風絵を参考にして描写されたと思われる表現が散見し、⁽³⁾仮名の散文表現の発達に屏風絵、屏風歌が果たした役割はとても大きい。花山院が編纂したとされる『拾遺集』には花山院の和歌の好尚が表れている。在位していた寛和二(九八六)年に行われた内裏歌合には、円融天皇の子の日の行事で退出させられたという曾禰好忠を招いており、花山院が

好忠を代表とする新風の和歌に理解を示していたことがわかる。また、『拾遺集』編纂に関与したとされる藤原長能と源道済の花山院への影響も考えられる。長能と道済の歌には、好忠歌や『万葉集』歌の影響がみられ、特に道済は、漢詩文を撰取した和歌を詠むことに意欲的で「河原院」に親しみを抱いていた。⁽⁴⁾その二人の趣向が『拾遺集』の撰歌基準に反映され、好忠を始めとする「河原院周辺歌人」詠や漢詩文に基づく歌などが多数入集することになった。紫式部の父藤原為時は、花山院の東宮時代に文章生の身分で副侍読として登用され、天皇の即位の際には式部丞に任じられ藏人であった。花山天皇の退位とともに十年間の散位生活に甘んじることになったが、為時は花山天皇の好尚を身近に見聞することでその影響を受け、それは娘の紫式部にも影響を与えたと思われる。

十世紀後半は、『古今集』の伝統的な歌風を受け継ぎながらも、新たな歌風が模索された時代であった。そこで活躍したのが「河原院周辺歌人」である。好忠や順、源重之ら初期定数歌人とともに、安法法師を主人とする河原院に集った恵慶法師・能宣・元輔・源兼澄・平兼盛らの人々である。彼らは、河原院を舞台にして、歌会や詩会を開き、仲間内だけで共通する趣向を持ち、和歌や漢詩文を詠んでいた。その中で順と能宣は、重明親王の娘である齋宮女御を中心とする文化圏とも関わりを持ち、その文化圏と河原院の文化圏は、隠逸的で漢詩文の影響の強い和歌を詠む点で重なりがみられる。順が源高明の家司であったことから、高明を中心とする文化圏とも重なり、そこから『蜻蛉日記』を執筆した藤原道綱の母との影響関係もみられる。

二 好忠と「河原院周辺歌人」

好忠は、「好忠百首」「毎月集」など、初期定数歌を発案し一世を風靡した。「好忠百首」に応じる形で「順百